

特別講演会 報告

中国・梅里雪山に深く関わってこられた方を講師にお招きして下記の特別講演会を開催し、会の内外から多くの方々が聴講されて盛会であった。

【講師・演題】フォトグラファー&ライター小林尚礼氏 「梅里雪山 十七人の友を探して」

【開催期日・会場】 2月20日（木）19～21時（2月度例会日）、オリンピックセンター

【聴講者】 35名（会員外来聴者含む）

【講演内容】

2年前、初登頂を目指した日中合同登山隊が中国雲南省の梅里雪山で雪崩に遭遇、隊員17名全員が死亡し、日本の海外登山史上最大の遭難事故となった。講師の小林尚礼さんは、当時日本側隊員の出身母体である京都大学山岳部の部員であったが、遭難発生当初から遭難事故捜索・支援に関わり、以来現在迄先輩や友人の遺体・遺留品捜索活動を毎年現地で継続してこられ、2006年、捜索活動や現地の写真を纏めた『梅里雪山 十七人の友を探して』（山と溪谷社）を出版された。現在も未発見の最後の一人が発見されるまで捜索を続ける、それが自分のゴールであると言っておられる。

今回は、その小林尚礼さんを講師にお招きして、遭難発生時の状況からその後現在まで続く遭難捜索活動や遺体・遺品の収容状況、現地の住民との交流、その間に見え隠れした日中関係の変化、観光地化して行く山麓の現状や氷河後退などの自然環境の変化、チベット問題など、深刻な問題が山積する山麓地域の現状、また遭難者遺族の現地に対する思いなども交えながら、講師自身の梅里雪山やその山麓の住民、チベットへの思い入れなどをお聞かせ頂いた。スライドで見せて頂いた梅里雪山などの写真も素晴らしいものだった。

特に印象的だったのは、遭難から現在まで長期にわたり捜索のために現地に滞在するにつれ、それまで登山の対象と考えていた梅里雪山は、その地に暮らす人々にとっては聖山であり、聖山というものには「親のような存在の生命の源であって、人智を超えた自然の根源であり、決して登ってはならない信仰の山である」と思うようになったと話されたことであった。梅里雪山は多くのチベット仏教徒にとって一生一度の巡礼の聖地であり、その大巡礼の様子なども沢山の写真で見せて頂いた。

当初は、自分たちの聖山を遭難で汚した外国人に協力的でなく、遭難者の遺体にも決して触ろうとしなかった現地の人々とも滞在を重ねる内に親しくなっていく様子、一方、遭難慰霊碑の日本人の名前に傷がつけられた悲しい出来事などのお話しも印象深いものだった。現地に深く根を下ろして活動されている人ならではの貴重な講演であった。改めて講師に御礼申し上げる次第である。



（記：大塚）